

二六三一番

ぬばたまの 黒髪敷きて 長き夜を 手枕の上に
妹待つらむか

二六三二番

まそ鏡 直にし妹を 相見ずは 我が恋止まじ
年は経ぬとも

二六三三番

まそ鏡 手に取り持ちて 朝な朝な 見む時さ
へや 恋の繁けむ

二六三四番

里遠み 恋ひわびにけり まそ鏡 面影去らず
夢に見えこそ